園部旧城下町における町家遺構の発展過程と地方的特質

THE CHARACTERISTICS AND DEVELOPING PROCESSES
OF THE TOWN HOUSES IN SONOBE, AN OLD CASTLE TOWN

大 場 修*

Osamu OBA

In this paper I explained the characteristics and the developmental process of the town houses in Sonobe, an old castle town by studying mainly the transformation of structures. In addition, I considered the consequence by comparing the town houses near there with the farm houses around there. The summary of this study can be given below.

- 1) The front gabled town houses are relatively older than the side gabled town houses, and the original structural forms are the same as the farm houses in Settsu and Tanba area.
- 2) I realized that the side gabled town houses were derived from the front gabled town houses, because the structures of the side gabled town houses were similar to that of front gabled town houses.
- 3) Both front and side gabled town houses in an old castle town developed, being affected by the farm houses in Settsu and Tanba area.
- 4) I recognized that the form of the town houses in Sonobe, an old castle town was the form of the town houses in wide area including Kameoka, Yagi, and Syuchi.

Keywords : Town Houses, Old Castle Town, Form Houses,

はじめに

園部旧城下町は、京都から近世の山陰道（中世以前は篠山を經由していた）に沿って北西約 30 km, 旧丹波国に位置し、城郭や武家屋敷は殆ど旧規を留めないが、町割や町家はよく残り、現在も妻入と平入が混在する特有の町並景観を留めている。

当町のように町屋敷地内において妻入と平入の異なった家屋形式が共存する場合、それ自体町並を特徴付ける重要な特質であるだけに、両者間の関連性の有無とその成立過程についての検討がおのずと課題となろう。

しかも亀岡、篠山両旧城下町を始めとする旧丹波国（及び旧摂津国）に所在する多くの町並も妻入と平入が混在する同様の町並景観を構成していることから、これらの地域にまたがる町家の共通性が予想される。しかも、この地域の町並は、妻入で縦割り型平面を特徴とする摂丹型農家の分布域に含まれることから（本稿第6節、図-21 参照）、この地域の町家は摂丹型に繋がることも予想される。

そこで本稿は、これまで建築調査が全く行なわれていない園部旧城下町を中心に提起し、園部旧城下町に残る町家の発展過程を妻入、平入別に検討したうえで、両

者間の関係を求め、さらにその家屋形式の諸特徴について旧丹波国の旧山陰道に沿う周辺の町並における町家を含めて検討し、さらに周辺農家との比較を通して、これらの町家の祖形式について実証的な検討を加えた。

なお本稿は、昭和 60～61 年度に実施された京都府立大学学術調査の一環として、当時の林野研究室が担当した当城下町の町家調査の結果に基づく研究である。この調査結果は、既に 62 年 10 月に建築学会にその概要を報告し¹⁾、城下町の全貌と調査対象とした 39 棟の町家の平面と構造の特質と変遷について概説した。また、63 年には京都府立大学より出された学術報告書の中の一編として調査結果の報告を行ない²⁾、上記論文を補足して、内容の充実に努めた。本稿は、さらにその後の調査に加え、園部周辺の町家や農家の様相をも加味して検討を加えたものである。諸先学のご教示とご叱正を賜れば幸いである。

1. 園部城下町の概要

園部城下町の成立事情については、既に竹岡林氏による研究がある³⁾。氏は、近世園部城は中世の園部城（天正 6 年、1578、明智光秀により落城）城跡を拡張して築

本論文の一部は、昭和 62 年度日本建築学会学術講演梗概集に発表した。

* 京都府立大学 助手

Assistant of Kyoto Prefectural University

城されたという見方が妥当であるとし、近世園部の城地が中世の平山城を受け継ぐものであることを指摘した点で重要である。

しかし、当城下町に関する都市史史料は必ずしも十分ではないために、本稿では城下の町屋敷地に絞り、その構成について概説するに留める。

園部藩の成立の経緯は、文化2年(1805)「略史前録草案」⁴⁾からその一部が知れる。元和5年(1619)但馬国出石城主小出信濃守吉親が2万9千711石で移封となる。吉親の城郭普請は、二重堀と塀を廻し、城は天守のない陣屋建てとした。このことは「近年園部城絵図」⁵⁾からもその様子を窺うことができる。吉親は城下町建設に際し、小向山北側を東流する園部川を大きく北側へ半円形に迂回させて町場の用地確保と防御を計ったという⁶⁾。このことは、城下の東方を流れる大堰川の所々にその工事の一環だとされる「意閑堰」⁷⁾、「意閑堤」(意閑は吉親の号である)が今日も残る⁷⁾ことから推察できる。

城下は、宮町、上本町、下本町(現本町)、新町、裏町(現若松町)、大村町の6ヶ町より成る(図一)。園部城北門(釘貫門)から北、本町筋との交差点(札の辻という)までの宮町には銀札所が置かれ、また、上本町西端の木崎口から新町東端の小山口まで8町半18間半の間には数か所の枋形が設けられていたという。この通りは山陰道(京街道)であることから、城下の商業的中心であると同時に、宿場としての役割も担っていた。また、街道筋の北側、園部川に沿う裏町は川沿いに「馬場」「外倉庫」が配され、水運を利用した物資積出口として賑った。

なお、大村町は城内の南背後に位置する。当町は城内に隣接することから、町家に混じり下級武士の居宅も多く建っていたのであるが、現在は殆ど建て替わり、古い町並は留めていない。

図一 園部城下町復原図

城下の町並を具体的に知る史料は少ないが、前出「略史前録草案」には、元和5年(1619)吉親の築城当時における侍屋敷の軒数をはじめ、各町の間口総間数及び町家総数が記されている。また、元禄13年(1700)「園部町大村町帳」⁸⁾(以下「元禄町帳」と呼ぶ)、及び安永8年(1779)「園部町、大村町家別間口改帳」⁹⁾(以下「安永改帳」と呼ぶ)などは、いずれも各町ごとに町屋敷の間口、奥行幅、所有者名が記録されていることから、近世中期の屋敷割、町家規模がおおよそ分り、かつ元和から元禄にかけての、近世初期の城下の町屋敷数の推移もある程度窺える。

それによれば、元和5年の町家総数は430軒であるが、元禄13年には454軒になる。また「元禄町帳」による明和3年改めの総家数は486軒とさらに増え、5年後の「安永改帳」も484軒とほぼ一致する。築城から18世紀後期にかけ、町家は一定の増加率で少しずつ増加し続けたといえる。

また、「元禄町帳」、「安永改帳」からは当時の町屋敷の間口幅の傾向が分かるが、表一は大村町を除く5町内における町屋敷地の間口幅(元禄、安永共に1間:6尺3寸棹で検地)を両史料で比較したものである。いずれも間口幅3間が最多で、3間半から5間半未満の町家がそれに続き、2間に満たないものから5間半幅までの町家をあわせると、元禄13年では総数の約72%であり、さらに安永8年では約81%に達する。すなわち、大半が中規模以下の間口幅の屋敷地で構成されていて、これらは町ごとに差はあるものの概して増加の傾向にあることが分かる。逆に、5間半以上の比較的間口幅の広い町屋敷地は、元禄から安永にかけて減少するが、家総数は増加する。つまり、この間に間口幅5間半以上の大きな屋敷地を持つ町家が細分化され、殆どが間口幅が3~5間半に小規模化された結果と推察される。

当時の町並景観の様子を知ることは困難であるが、貝原益軒の紀行文「西北紀行」(元禄2年, 1689, 「諸州巡覧記」所収)には、園部について僅かながら「園部は鳥羽より一里あり、小出伊勢守殿在所なり、町長く民家良

表一 元禄—安永、町屋敷地の間口幅比較表

間口幅 (間)	間口幅の変化 (戸)																			計	間口幅の変化 (戸)				
	1.5	2	2.5	3	3.5	4	4.5	5	5.5	6	6.5	7	7.5	8	8.5	9	9.5	10	10.5		拡大	縮小	分割	統合	変化なし
町 名																									
上 本 町		1	5	9	5	4	5	2	4	1	1	1								38	4	6	3	0	25
		1	7	9	10	3	6	1	2	1										40					
本 町		1	9	7	13	15	7	8	6	3	1	3	4	1	1	1	2			83	13	15	6	0	47
		1	7	10	14	18	17	10	1	2	1	2	1	1						86					
新 町		1	4	14	3	8	3	26	11	10	4	3	4		3		4	1		100	4	4	10	6	79
			5	22	4	13	4	27	11	7	3	4	1	1	2		2		108						
裏 町		2	4	7	20	2	12	5	6	2	7	1	3	1	1	1	1	2		79	6	6	5	1	60
		2	5	5	21	2	12	8	8	2	6	2	4	1	1	1				83					
宮 町		1	4	10	10	9	6	5	2	5	4	2	2	1	1	1				63	6	5	2	1	49
		1	4	13	9	10	6	5	2	4	1	3	3	1	1	1	1			64					
段 町			2	4	1		1	1	1	3			2							14	2	1	1	0	10
			1	1	6	1	1	1	2	2										16					
大 村 町			2	13	14	8	13	7	8	5	1	7	1	1	1					81					
	2		1	15	22	11	14	7	8	4	1	2	1		1					89	4	3	8	1	63
計		2	10	42	76	45	62	33	56	31	30	18	13	14	4	5	2	4	3	454	39	40	35	5	333
		2	2	9	44	98	56	71	49	60	24	22	10	14	7	5	2	2	2	484					

上段:元禄13年の町家戸数
下段:安永8年の町家戸数

の7種に分類し、図—2に表示した（表—2の記号と同じ）。

以下、妻入、平入別に、まず各年代の発展段階における形式的特徴を良く示す代表遺構について概説し、各年代の諸特徴を求めた上で、平面・構造上の発展過程を検討する。さらに、後節ではこれら町家の形式及びその発展過程を、特に構造に注目しつつ周辺町家及び農家との関連において再考し、その地方的位置付けについて言及する。

3. 妻入町家の平面、構造と発展過程

3-1 妻入町家の代表遺構

1) 野村幸男家住宅（本町、18世紀中期、図—3）

居室廻りが著しく改造を受けたため柱間装置は不明を多く残すが、妻入で2列型は当家长宅のみであり、しかも居室上手に諸装置が無く壁のみである点は、妻入の割に大きい間口幅を勘案すると、以下で述べる他の遺構に比べ一段と古式である。構造は、長い梁行の小屋梁の上に和小屋を組み、土間居室境、土間、居室各上部の計5本の桁行梁がこの小屋梁を受け、さらにその下に梁行梁を渡す。ちょうど桁行梁を二重梁で挟む複雑で念入りな方式をとる。なお、2階は表のみに低いツシを設けるだけである。

以上、当家长宅は居室上手に装置が無く、2階は和小

屋の屋根裏で、しかも桁高が低く材も古いことを考慮に入れると、次に述べる片山弘家住宅と比べて古風であり、妻入最古の遺構と考えられる。

2) 片山弘家住宅（本町、寛延4年、1751、家系図の写し、図—4）

居室廻りの改造のため、当家长宅も平面の詳細は不明ながら、1列4間取り型で、居室上手には既に床、棚（？）、仏壇、押入の諸装置が並ぶ。しかし座敷に欄間、書院、長押等は設けず、また居室上手の諸装置の奥行幅も60センチで遺構中最小幅である。桁高は低く、ツシ2階はミセ上部に設け、他を和小屋の屋根裏とするなど野村家住宅と同様古風であるが、ナカノマ上部の一部に登り梁（1本）を架けて母屋を受け、土間から物置として使えるような配慮もみられる。構造は、梁間が短いため桁行梁は3本であるが、基本的には野村家住宅と同じと認められる。従って、両家住宅の構造は18世紀中期の妻入町家の典型として注目される。

3) 吉田喜一家住宅（本町、天明6年、1786、鬼瓦銘、図—5）

この遺構も1列4間取りで、押入など諸装置の奥行の浅さ（70センチ）は片山家住宅と良く似ている。また、土間居室境を胴差の1本溝（但し戸袋なし）とする手法は古式であるが、ミセ、ナカノマ間を通して長く1本溝とする方式は、他にも湯浅なお家住宅（本町、安永3年、

図—3 野村幸男家住宅（妻入）復原平面図、復原断面図

図—4 片山弘家住宅（妻入）復原平面図、復原断面図

図—5 吉田喜一家住宅（妻入）復原平面図、復原断面図

図—6 湯浅なお家住宅（妻入）復原平面図

図—7 岡本光一家住宅（妻入）復原平面図、復原断面図

1774, 鬼瓦銘, 図—6), 中川一雄家住宅(本町, 寛政7年, 1795, 家系図写しより)など, ほぼ同時代の町家に共通して認められる。

構造は, 土間上部は片山弘家住宅と同じであるが, 居室側は小屋梁のみで梁下にすぐ棹縁天井を張り低い2階居室を設ける(そのため階下の1階座敷は大引天井となる, 表—2参照)。つまりこの構造は, 2階居室を設けるために片山家住宅の架構の一部が省略された形と見なせよう。このような居室上部の2階居室も, 湯浅, 中川両家住宅に共通して認められ, かつその構造も当家住宅と同様である。

4) 岡本光一家住宅(河原町, 弘化4年, 1847, 祈禱札, 図—7)

1列3間取り型の平面は, ミセを土間とし, 居室列が土間境で食い違う。ミセを土間とする遺構は珍しく, 当家住宅だけで確認された。恐らくは家業との関係が予想されるが, 当初の家業は不明でその理由は明らかにし難い。また, 仏壇は座敷に設けられている(床, 仏壇, 棚と並ぶ)。仏壇の位置, 換言すれば専用の仏間の有無については, 例えば同じ1列3間取り型の湯浅家住宅(安永3年, 1774, 図—6参照)も座敷に仏壇を配するように, 1列3間取り型では座敷は仏間を兼ねることが多い。専用の仏間を設ける点が1列4間取り型との平面上の違いであることが窺える。

構造は, 梁行に1本の小屋梁を架け, 土間居室境の桁行梁がそれを受ける単純な構成が特徴である。また, 2階に居室を設けない点も前記吉田家住宅等と異なる。そのためか, 座敷は同家住宅などとは異なり棹縁の釣り天井とする。従って, これは1階座敷の書院座敷化を図る前提条件となる構造と見なせ, 事実, 次に取りあげる森田恭子家住宅にこの形式は引き継がれ, 書院座敷化が格段に進む。

なお, この構造による早い遺構例は文政4年(1821, 鬼瓦銘)の高屋敬一家住宅である。ただし, 当家住宅は後に居室上部の梁を切断して高く持ち上げ, その下に2階居室を増設したため, 現状は当初の形状を留めない。

5) 森田恭子家住宅(宮町, 嘉永3年, 1850, 鬼瓦銘, 図—8)

岡本家住宅と基本的には同様の構造をもち, 2階居室を設けない。また, 座敷飾りが付書院, 長押を含め揃い, 押入の奥行も深い。この時期の妻入町家は, 2階の居室化より1階の書院座敷化を優先する傾向が読み取れよう。

3-2 妻入町家の構造類型と年代区分

妻入を代表する上記5遺構の構造は, 野村・片山両家住宅, 吉田家住宅, 岡本・森田両家住宅の3グループが互いに区別されるべき特徴を備え, かつ年代的にも並びうる関係にある。現存する他の妻入遺構の構造もいずれ

図—8 森田恭子家住宅(妻入)復原平面図, 復原断面図

図—9 妻入町家構造類型

かに属することから, 上記3グループの構造を妻入町家の代表的構造類型と位置付け, 便宜上それぞれをA型(野村・片山両家住宅), B型(吉田家住宅, 他), C型(岡本・森田両家住宅, 他)と仮称する(図—9)。

しかも3種の構造類型は, 最古の野村家住宅(A型)を筆頭に, A型:18世紀中期以前, B型:18世紀後期, C型:19世紀前期以降に各々対応し, 結果的に構造の発展過程を3期に大別できる(表—2参照)。さらに妻入A~C型の発展過程は, そのままそれぞれが妻入町家の異なった段階に対応するとみなしうる。

そこで, 野村・片山両家住宅の18世紀中期以前を妻入Ⅰ期とし, B型が確認できる湯浅家住宅より中川家住宅までの18世紀後期を妻入Ⅱ期と考え, さらにC型の高屋敬一家住宅以後の19世紀前期以降を妻入Ⅲ期とみなした。

3-3 妻入町家の発展過程

Ⅰ期は18世紀中期以前の古形式を, 野村家住宅は平面と構造に, 片岡家住宅は構造になお留めた段階と理解できよう。以下の各期の変遷過程は構造の単純化, 簡素化の過程であると同時に, Ⅱ期は2階の居室化が特徴として指摘でき, Ⅲ期では1階座敷の書院座敷化が目される。Ⅱ期は, 2階に居室を設けるために1階座敷天井は大引天井となるためか, その書院座敷化は進展せず, Ⅲ期では座敷上部が逆に屋根裏(あるいはツシ2階)として座敷に棹縁天井を釣り, 座敷の書院座敷化が著しく進む。

なお, 妻入町家は明治以降も建て続けられ, 遺構も数棟現存している。これらには予備調査の段階でも2階の居室化等が看取され, いわば妻入Ⅳ期に相当する発展段

階が想定された。しかし今回の調査研究では、種々の制約からこれら遺構を詳しく調査ができなかったため、やむなく割愛した。

3-4 妻入町家の平面構成

次に、妻入町家の平面に注目し、その年代的变化を検討する。

I, II期の遺構のナカノマと座敷の大きさを比較すれば、ナカノマは殆ど8畳であり、座敷より広いか同じ広さである(表—2, 図—3, 4, 5, 6参照)。I, II期の座敷は座敷飾りが無いか不揃いであり、むしろナカノマが生活の中心として相対的に重視されているように思える。それがIII期になると両者の関係は逆転する。III期では書院座敷化が進み、ナカノマから座敷へと居室構成の重心が移動する。III期に集中する食い違い型間取りは、座敷をナカノマよりも広くとる(6畳のナカノマに対して座敷を8畳とする)結果であると推察される。

なお、居室上諸手装置の奥行幅は、I期の片山家住宅が最小幅であるが、II期においても余り変化がみられない(押入, 床, 棚共に同寸法)。III期に至り、幕末から明治初期にかけて押入の奥行幅はようやく約半間幅となる。つまり、年代が下るに従い奥行幅を増す傾向はおおよそ窺えるのであるが、その奥行幅は概して浅く、かつ遺構ごとにまちまちで不揃いであることも知られた。

4. 平入町家の平面、構造と発展過程

4-1 平入町家の代表遺構

平入町家についても、まず各期を代表する遺構につき概説する。

1) 杉森亮侶家住宅(上本町, 天明7年, 1785, 鬼瓦銘, 図—10)

平入最古の遺構例である。間口幅の広い2列6間取り型であるが、土間廻りと土間沿い居室が大幅な改造を受け、不明な点の多いのは惜しまれる。上手居室列は床、棚に欄間が揃い、同時期の妻入町家より書院座敷化がやや進んでいる(これは間口幅の違いから想起される階層的な違いなのかもしれない)。また、居室上手諸装置の奥行幅が間口幅の長さにもかかわらず75センチと浅い

図—10 杉森亮侶家住宅(平入)復原平面図, 復原断面図

図—11 犬石秀夫家住宅(平入)復原平面図, 復原断面図

図—12 野田健一家住宅(平入)復原平面図, 復原断面図

ことは、妻入I, II期の片山, 吉田両家住宅(70センチ)に類似する。

構造は、ミセ上部は登り梁を架けてツシ2階とし、ナカノマから裏手は表裏に長い梁を二重に渡し、上部を和小屋とする。下方の梁は長い桁行梁(牛梁)で支持される。二重梁で棟を高めているために、大屋根は裏手に長く葺き降ろすことができ、表裏に居室が深くとれる。この家は、ミセ上部をツシとする以外は、他の居室上部をすべて屋根裏とすることは古式といえる。

2) 犬石秀夫家住宅(上本町, 寛政10年, 1798, 鬼瓦銘, 図—11)

1列4間取り型のこの町家は、仏間と座敷の上手のみに装置を設け、他は壁のみとする点や、土間居室境を戸袋付き1本溝とするなど、平面構成は古風である。また上手の装置すべての奥行幅が70センチと浅い点も、杉森家住宅, さらには同時期の妻入遺構と同じ傾向を示す。

構造は、表を登り梁でツシ空間とし、裏方は前記杉森家住宅のように二重梁とせず、小屋梁は表桁高より高い位置に1本のみとし、ナカノマ上部にも空間(ツシ)を造ることが可能となった。しかし、この小屋梁は2本の牛梁と地棟で挟まれていることは、杉森家住宅よりも複雑である。また、座敷、カマヤ上部は鋸状に屋根を降ろす点も杉森家住宅と異なる断面形状である。

3) 野田健一家住宅(宮町, 享和2年, 1802, 鬼瓦銘, 図—12)

平面で注意すべきは、土間居室境の食い違い方であろう。前記遺構のような座敷を土間方に突き出す食い違い方は異なり、この家は逆に座敷を引き込んでいる(表

—2ではこのようなずれ幅をマイナスで表示した)。これはナカノマの押入れを間中（半間）と深くしたため、座敷の床、棚の奥行（これは深くする必要がない）との差の分だけずれが生じ、結果として土間の裏方のクド廻りが広がったものと考えられよう。また、食い違う箇所には柱（通し柱）が省略されずに建つ点は、前記犬石家住宅と共通する（次の遺構では、その省略化が認められる）。

さて、構造は、前記までの平入町家の特徴であった桁行、梁行の長い梁は共になく、主要な柱は全て母屋まで通する新しい形式をとる。当家住宅は、この形式をとる遺構のなかでは最古である。

4) 西田信夫家住宅（本町、文化7年、1811、鬼瓦銘、図—13）

土間居室境の食い違い形状は野田家住宅と同じではあるが、食い違い箇所の柱の省略は野田家住宅より一歩進んだ方式とみなせよう。断面形状は、裏手2室を角屋とする点に特色があるが、これは当家住宅のみであった。しかし、大黒柱を通し柱とせず、桁行梁を支持しその上に長い梁行梁を渡す構造は野田家住宅とは異なり、むしろ杉森家住宅の梁行梁と桁行梁との構成に似ている。

5) 船越武一家住宅（新町、嘉永4年、1841頃、図—14）

この遺構も構造に特徴がある。長い梁行梁を土間居室境上部に通す点は、裏手の大屋根を長く葺降し、居室裏手上部を屋根裏とすることと併せて杉森家住宅との共通

図—13 西田信夫家住宅（平入）復原平面図、復原断面図

図—14 船越武一家住宅（平入）復原平面図、復原断面図

図—15 山田正一家住宅（平入）復原平面図、復原断面図

性が窺える。しかし、梁行梁を受ける桁行梁（牛梁）を持たない点は杉森家住宅と異なり、より簡略化されている。また居室上手の装置の奥行幅は89センチとほぼ半間に近く、しかも床、棚の奥行だけを浅くする点は上記までの遺構には無い新しい傾向である。当家住宅以後、野田、西田両家住宅のような食い違いは認められなくなる。

6) 山田正一家住宅（上本町、明治2、3年前、図—15）

この遺構で注目されるのは、断面の構成である。構造は野田家住宅と同様の形式をとるが、裏手の桁高が野田家住宅や船越家住宅より高くなり、それに伴い裏手を含む居室上部がすべてツシ2階となる。

7) 片山清七家住宅（新町、明治2、3年、図—16）

2列5間取り型で、前庭をとる平面形式はこの遺構だけである。この家の特徴もやはり断面構成にある。つまり、裏手の桁高が表に比べ著しく高く、2階には裏手に2階座敷を設けるなど、居室化の進行が注目される。

4-2 平入町家の構造類型

以上の平入7遺構を構造の類似性に注目して分類すると、杉森・西田両家住宅、犬石家住宅、野田・山田・片山清七各住宅、及び船越家住宅の4種となろう。

他の平入遺構の構造も以上4種のいずれかに属することから、これらを平入の代表的構造類型と見なし、a型（杉森家住宅、他）、b型（犬石家住宅）、c型（野田家住宅、他）、d型（船越家住宅、他）と仮称する（図—17）。

これらを相互に比較すると、まずa型とb型は類似性が強い。なかでもb型は最も複雑な形式であり、a型はb型がもつ二重の桁行梁（牛梁）を1本とした構成と見なせよう。一方、c型はすべて通し柱で構成され、上記a、b型のいずれとも関連が認め難い独自の構造形式である。逆に、d型はa、b型との関連性を示し、具体的にはa型から桁行梁を抜き、梁行梁のみとする簡略化が進んだ形式と受け取れる。

4-3 平入町家の年代区分と発展過程

18世紀後期から19世紀前期の平入町家は、鬼瓦銘などから年代が明確な遺構が多い。幕末から明治期の遺構は鬼瓦銘の習慣がなくなるのか、年代の判定史料に乏しいが、この時期になれば聞き取りでもおよその年代が判

図一16 片山清七家住宅（平入）復原平面図，復原断面図

図一17 平入町家構造類型

断できるため、これらを年代順に並べ、以下平入町家の平面、構造の変化を検討した（表一2）。

杉森，大槻章（上本町，寛政2年，1790，鬼瓦銘），犬石各家住宅は，平面，構造共に取り立てて区別できない（但し，大槻家住宅は，2階に居室を設ける点が異質であるが，当期及び続くⅡ期においても2階居室をもつ遺構は他に認められず，当家住宅はむしろ特例と見なしたい。調査遺構中最小の間口幅故であろうか）。しかしながら，続く野田家住宅は上記3遺構の構造と区別されるべきc型の遺構であり，以下この構造が多く認められることから，犬石家住宅までを平入Ⅰ期（18世紀後期）とみなし，野田家住宅以降を平入Ⅱ期と考えた。

Ⅰ期の平入遺構はa，b型構造をもち，平面は居室上手の装置の奥行幅が同期の妻入町家と同様に浅い。しかし，杉森家住宅の間口幅のゆとりから勘案すれば，この奥行の浅さは敷地間口幅の制約ではなく，むしろ18世紀に遡る妻入，平入両遺構に共通する平面上の特徴とみなしえよう。また座敷が6畳で，ナカノマと同じか小さいという傾向も同時期の妻入遺構と共通する。

Ⅱ期は19世紀前期～中期に属する。構造はc型が多く，a型も残りd型も併存する。同期の遺構は座敷が殆ど8畳となり座敷飾りも揃ってくる。しかし，裏手桁高はなお低く，裏手居室上部は屋根裏のままである。

続く明治2，3年前の山田家住宅は裏手桁高が表より高まり，居室上部は全面ツシとなる。このような形状を，平入町家における2階の居室形成に至る過渡的な段階と位置付け，同家以降を平入Ⅲ期（幕末～明治初期）とし，2階が未発達なⅡ期と区別した。Ⅲ期を通して裏桁高は漸次上昇し，森本森造家住宅（本町，明治前期）では桁高の表裏の差が1メートルを越え，2階に居室ができる。（表一2「裏一表総桁高の差」の項参照）。平入町家の2階は，裏桁高の増加と呼応しつつ形成されたことが確認

された。

またⅢ期では，杉本惣兵衛家住宅（新町，幕末期）にて長押が揃い，座敷飾りが完備される。座敷飾りが出揃う時期は妻入町家とはほぼ同時期である。

さらに片山清七家住宅では裏桁高が一段と高まり，座敷飾りを備えた2階座敷が成立している。2階座敷の成立をもって平入町家の新段階と見なし，当家以降を平入Ⅳ期（明治以降）とした。当期は裏手桁高が十分に高く，また1階座敷，2階座敷共に座敷飾りが揃い，平入町家の完成期とみなせよう。

しかし，表桁高に注目すれば，逆に目立った上昇は認められない。事実，表側（ミセ上部等）は居室化がなされずツシ2階のままで明治末期に至る（表一2「1階居室列上部」の項参照）。換言すれば，2階の居室形成にもかかわらず，中2階建の外観が明治末期まで強く墨守されたといえる。

5. 妻入と平入の関係

前節では，妻入と平入別に平面，構造の特徴と発展過程を明らかにしたが，では平面，構造の諸特徴は妻入，平入の違いと如何なる関係にあるのだろうか。以下で考察する。

まず，調査遺構の平面形式及び規模と，妻入，平入の違いとの関係について検討した（図一18）。奥行方向では，奥行の深い4室型町家が妻入，平入共にみられ，奥行幅に両者の違いは認め難い。また間口幅も妻入に少数ながら2列型事例（野村幸男家住宅）が存在するため，間口幅5間半以下の範囲では，平入に対する妻入独自の間口幅領域を限定することは難しく，5間半を越える大型間口の町家について，初めてその殆どが平入であるといえる。

つまり，間口5間半以上の大型町家を除けば，妻入，平入相互の平面規模には特記すべき違いは認められず，妻入，平入の違いは家屋規模，平面形式の何れにも求め難いといえる。

また前節で検討した妻入，平入別の平面上の諸特徴，例えば居室上手の諸装置の奥行幅，座敷飾りの設置状況の推移，柱間装置などに，いずれも妻入，平入を区別しうる特徴は認め難い。平面構成上も，両町家は互いに区別されるべき固有の特性を備えない。

次に，構造とその発展過程について妻入と平入を比較し検討する。

図—18 平面形式と家屋規模相関図

図—19 犬石秀夫家住宅（平入）
桁行復原断面図

図—20 吉田喜一家住宅（妻入）桁行復原断面図

例えば犬石家住宅（平入）の構造（平入b型）は、その桁行断面（図—19）が、実は妻入の吉田家住宅（妻入B型）の梁行断面（図—5 参照）と、梁組や小屋組などに強い類似性が認められる。吉田家住宅の桁行断面（図—20）も犬石家住宅の梁行断面（図—11 参照）と同様の構成をもつ。従って、平入b型と妻入B型とは共通の構造形式であるとみなせ、この場合平入と妻入の違いは、極論すれば単に屋根の架け方の相違であるといっても過言ではなかろう。その意味で犬石家住宅は、妻入との構造上の類似性を示す平入の遺構例として注目される。

杉森家住宅（平入a型）も、犬石家住宅よりやや簡素な形式ながら、その構成は妻入町家に通じる。

船越家住宅に代表される平入d型は、長い梁行材を受ける桁行梁がない点が平入a型と異なる。この桁行梁は妻入では小屋梁に相当する構造材であるから、この部材の消滅は妻入との構造上の関連性が薄くなったことの

指標となろう。しかしながら、なお残された梁行梁を妻入との関連性の痕跡と見なすことは許されよう。

このように平入の構造は、b型を始めa型、d型にいずれも妻入との関連が認められた。これら妻入の構造を備える平入町家の特質から、平入町家の祖形は妻入に求めうと考えられる。

平入b型の妻入との強い類似性は、併せてb型がa型に先行する（遺構年代は逆順するが）平入構造の古形式と見なしうる可能性を示すとは言えまいか。恐らくはb型形式の古い遺構はすでに現存せず、例えばc型やd型が成立した後になおa型町家が建て続けられていることから、b型の犬石家住宅は、a型（杉森家住宅）成立後に建てられた、古形式を強く墨守した保守性の強い遺構である可能性を指摘しておきたい。

一方、平入c型（野田家住宅、他）は、a、b、d型の何れとも異なる構造形式であり、妻入との構造上の関連が認め難い。またc型は年代的にはa、b型に続き早くも19世紀初期には成立することから、a、b→d→c型のように類似の構造形式の変化の結果としてc型を位置付けることも難しい。つまり、野田家住宅では平入独自の構造形式が成立しているといえ、妻入の影響を早期に脱した発展方向を示す遺構として注目されるのである。

以上、平面、構造について妻入、平入相互の関係を検討した。平面の上からは両者は特記すべき違いはなく、同様の構成をもつことが分かった。構造も、両者には強い類似性が看取された。しかも年代の古い構造形式ほどその傾向が顕著であり、平入が妻入と類似する構造によって構成されていることは、平入は妻入から派生して成立したことを窺わせる。さらに、平入は妻入との関連が認めにくい新たな構造形式を確立させることもわかった。

6. 周辺地域の町家との比較

始めに述べたように、園部町周辺には旧山陰道にそって京都から亀岡（旧亀山城下町）、八木（旧園部落領の街道集落、旧八木村）、園部を経て丹波町須知（旧亀山藩領の街道集落、旧須知村）などの町が点在し、いずれも妻入と平入の町家が混在する、園部旧城下と似た歴史的町並を良く留めている（図—21）。とすればこれら周辺地域の町家も、当町町家の特に構造に特色付けられる家屋形式を同様に備えているのであろうか。筆者は、園部と併せてこれら諸地域においても少数例ながら関連調査を実施した（表—3）。当町の町家を、これら諸地域の町家との比較において再考する。

亀岡においては、既に林野全孝博士による調査研究がある（以下林野論文と呼ぶ）¹¹⁾。この研究報告は、残念ながら梗概に留まり、具体的な変遷過程までは論じられなかったものの、18当世紀前期に遡る遺構を含む古い町

図-24 福島芳郎家住宅（平入）復原断面図

図-25 岩崎純一家住宅（妻入）復原平面図，復原断面図

秋山家住宅，明治後期）と，遺構例は少ないが，園部の妻入遺構と同様の構造形式の発展を遂げることが看取できる点も注目される（表-3 参照）。

一方，須知の平入では18世紀に遡る遺構は確認できず，蔭山四郎家住宅（2列6間取り型，19世紀前期）を最古として，森本康一家住宅（2列6間取り型，明治2年頃，図-26）以下，明治，大正期の遺構が続く。これら平入の構造はいずれも園部の平入a型をとり，妻入と共に，平入も園部との類似性が確認されたといえる。

しかし，須知の平入町家が犬正期までa型の構造形式を長く踏襲する点は，園部の平入町家が19世紀中期に既にc，d型形式を主流とすることと異なる。しかも裏桁高に目立った変化が認められず，19世紀前期の低い桁高を維持し続け，2階がミセ上部のみに限られる点も，明治初期に2階座敷が成立する園部と比較すれば保守的である。これらは，園部に対する須知の町家の地方差として併せて指摘しておかなければならない。

以上，旧山陰道に沿って園部旧城下町と隣接する各町並の町家遺構を概観した。いずれの地域も妻入と平入が混在し，これらの町家は平面を始め，特に構造面で園部城下の町家と強い共通性が確認された。従って，換言すれば，園部旧城下町の町家形式は，旧丹波国の山陰道沿

図-26 森本康一家住宅（平入）復原断面図

図-27 旧岡花家住宅竣工平面図，断面図『同家住宅移築修理工事報告書』より

いの町並に共通する地方形式として位置付けることが許されよう。

7. 周辺農家との関連

園部城下の町家形式が周辺の町並をも含む広域の地方的形式であるならば，その成立を検討するためには，さらに周辺農家との関係が問われなければならない。

始めに述べたが，旧丹波国を始め，摂津，山城の一部は既往の民家調査により摂丹型農家の分布圏であることが明かとなっている¹³⁾。園部を始め，本稿で取り扱った各町並に近在する摂丹型農家の代表的遺構としては，丹波地方における摂丹型農家の最古と考えられる旧岡花家住宅（重文，旧所在地：船井郡瑞穂町質志）があげられよう¹⁴⁾（図-27）。当家住宅を始めとする摂丹型農家は，その古形式が茅葺妻入で表側に座敷を配する1例3間取り型縦割り平面とし（旧岡花家住宅は土間裏手にも小室を設ける），さらに図-27に示す構造に主たる特徴がある。

これら諸特徴のうち縦割り平面については，町家にとってこの種の平面形状は，当地域に限らずむしろ一般的であろうことから，そのまま摂丹型農家に繋るとは考えにくい。また居室配列も，園部では寛延4年（1751）の片山弘家住宅が既に居室最奥に座敷を設けているし，亀岡では享保9年（1724，棟札）の旧福井孝治家住宅にも同様の居室構成が成立していることから¹⁵⁾，18世紀前期に遡っても，平面の上からは摂丹型農家との関連は判然としにくい。町家平面の成立過程を求めるには，恐らく近世前期に遡る必要がある。

この点では，17世紀に遡る古い町家遺構に恵まれた

奈良盆地の町家において，四間取り農家と同様の平面構成から座敷を最奥に配する町家独自の平面の成立が，構造の変化より著しく先行して認められること¹⁶⁾を考え合わせると，当地域では18世紀前期以前の遺構が現存しない以上，平面の上で摂丹型農家との関連は明らかにし難い。

図-28 中川平六家住宅（妻入）復原平面図、復原断面図

従って当該町家と摂丹型農家との接点は、妻入を主体とする町並であることと、構造の類似性に求めるべきであろう。すなわち、各町並ともに妻入町家が平入町家に先行して確認され、妻入が相対的に平入より古いこと。かつ古い町家は摂丹型農家との構造の類似性が強い。具体的には、妻入A型あるいはB型の構造形式は、茅葺と瓦葺の違いによる小屋組の違いを除けば、摂丹型茅葺妻入農家の構造と類似し、しかもこの構造は摂丹型特有であることから、当該町家の祖形式は摂丹型農家以外には求め難いのである¹⁷⁾。

しかしながら、当地域の町家の祖形式と摂丹型農家との関係を具体的に検討するには、城下町あるいは街道町の成立期にまで遡った考察が必要となろう。園部城下では、遺憾ながらこのような史料に恵まれず、その形成過程は冒頭に述べた程度しかわからない。亀岡（旧亀山）城下町については、城下の建設に際し、亀山城周辺の9ヶ村がそのまま城下町に編成替えされたことにより成立したと考えられている¹⁸⁾。しかも城下は、その後独立した町政をとりながらも、その経済基盤は農業を主とするものが多いため、旧郷村制の伝統が長く残り、新しい町制と旧郷村制の二重形態（例えば、古世村分横町、追分村分北町などの呼び方にも窺える）が続いた。当城下における町家遺構の摂丹型農家との関連性は、当城下に先行する農村集落を母体とする成立過程に求めることができそうであり、摂丹型農家を祖形として町家が成立した可能性が強い。

ところで、これまでとりあげた町家の調査遺構は全て瓦葺であるが、それは園部、亀岡、須知の町並に茅葺町家がもはや残存しないためである。しかし、昭和40年度調査による前記林野論文では茅葺の妻入町家が数棟調査され、いずれもみな摂丹型農家と同様の構造をもつことが確認されている。また、これらのなかには、当時瓦葺妻入最古の遺構（旧福井孝治家住宅、享保9年）よりも古い茅葺妻入遺構（旧松波小春家住宅）が発見されていることから、瓦葺が普及する以前の亀岡の町並は茅葺の町並であったと推察されるし、他の集落も恐らく同様であったであろう。

筆者は、園部周辺の街道沿いに茅葺町家を数棟求めて

調査した。図-28は篠山街道沿いの茅葺妻入町家の一例である（中川平六家住宅、1列3間取り型、幕末頃、亀岡市東本梅町¹⁹⁾）。建築年代は異なるものの、構造は林野論文における亀岡の旧茅葺妻入町家と同じであり、かつ摂丹型農家に特有に構造である。このような事例からも、瓦葺町家に先行し、摂丹型農家の構造を受け継ぐ茅葺妻入町家の構造が、瓦葺構造にそのまま踏襲されたものと推測されよう。

このように考えるとき、園部城下の平入構造の1類型である平入c型（野田家住宅、他）は、妻入との構造上の関連が認められる平入a, b, d各型とは区別され、また須知の平入町家の発展過程では大正に至ってもこの種の構造形式が確認されない事実なども勘案すれば、園部の平入町家の発展過程を特徴付ける構造形式として注目される。

平入c型の母屋までの通し柱と胴差による構成は、平入だけに認められることと合せて、例えば京都の町家構造との類似も窺われることから、京都などの町家形式の影響が可能性として指摘できよう。しかし、現在のところ、京都との水運等による頻繁な物資の交流は確認されるものの²⁰⁾、京都からの町家建設にかかわる技術導入など具体的な影響関係は史料的制約から明らかにし難い。

この問題は、京都あるいは大阪近在の町並における町家形式の形成の解明において重要であるだけに、筆者の今後課せられた課題としたい。

結 語

以上、園部旧城下町における町家遺構の特徴と発展過程について、構造の発展を中心に妻入、平入の違いに注目しつつ、近隣地域の町家、さらには周辺農家との関係をも含めて考察した。以下にその結果を要記し、まとめる。

(1) 妻入町家は、平入町家より相対的に古く、その構造は、遺構年代が遡るほど摂丹型農家に類似することから、当城下の町家の祖形式は周辺の摂丹型農家である可能性が強い。

(2) 同様に平入町家も、妻入との構造上の類似から、妻入町家から派生したものと考えられる。

(3) 従って城下の町家は、妻入、平入共に摂丹型農家の影響下で発展したといえる。

(4) このような園部旧城下の町家は、近在の亀岡、八木、須知など、山陰道に沿う各町並の町家遺構とも共通することから、園部城下の町家はこれら諸地域を含む広域の地形式と考えることができる。

(5) 妻入と平入の違いは、平均的な間口幅の範囲(約6間以下)では平面、規模、平面構成の諸特徴も含めて殆ど認められず、平面の上では妻入、平入は区別できない。

(6) 従って18世紀以前の古い町家では、妻入、平入の違いは平面の共通性や構造の類似性により、極論すれば単に屋根の架け方の違いによる外観のみの違いであるともいえよう。

(7) 平面形式は妻入、平入共に1列型が量的主流を占め、かつ古い遺構の多くはこの形式である。大型の2列型町家は主として平入町家であり、特に19世紀中期以降の町家に多い。

(8) また、18世紀の町家の多くはナカノマが座敷より広く、ナカノマが居室の中心であることが窺える。

(9) それに対して19世紀以降の町家は、ナカノマより座敷を大きくとり、それに伴い1列型町家では土間居室境で居室を食い違える遺構例が多く認められる。また座敷飾りも立派になり、特に幕末以降、書院座敷化が顕著に進む。

(10) 構造面での18世紀後期以降の発展過程は、妻入、平入共に摂丹型農家構造の簡略化を辿るが、平入町家は摂丹型の構造とは関連のない独自の構造形式を確立する。

(11) この間、平入町家は漸次高まる裏桁高と平行に連動しつつ2階の利用が高まり、明治に入ると2階居室が成立する。

(12) このような園部旧城下の平入町家の発展は、18世紀以来の古い構造形式を長く踏襲し、かつ2階形成も認められない須知の平入町家と比較したとき、摂丹型民家の影響下における町家の内発的な構造的変化だけでは考えにくい。例えば、当時園部城下と交流の多かった京都の町家形式などとの外的な要因も想起されるが、本稿ではその可能性の指摘に留めた。

謝意

本稿を草するに当たっては、終始林野全孝博士より親身なるご指導を受けた。家屋調査においては、園部町教育委員会(高木茂教育長)から多大の御協力を得、とりわけ調査依頼に際しては西田信夫先生に全面的にご支援頂いた。また、田中耕一郎氏には史料調査において何かと便宜を計っていただき、並河康夫氏には、大工技法に関する貴重なご教授を受けた。さらに、家屋調査は、林

野博士を始め京都府立大学住居学科の大学院生、専攻生の多数の協力を受け、なにより町家各家々にお住まいの方々に全面的な調査協力を得て実施された。合せて深く感謝の意を表するものである。

注

- 1) 大場 修, ほか「園部城下町の町家について その1」「同 その2)」『日本建築学会学術講演梗概集』昭和62年
- 2) 京都府立大学桂川流域学術調査の一環として町家調査を実施し、昭和63年に林野博士と連名で「園部旧城下町の町家に関する調査研究」と題し、同調査報告を行なっている。
京都府立大学「桂川流域学術調査報告」昭和63年
- 3) 竹岡 林「丹波園部城」
- 4) 出野 明文書、「園部町史」史料編Ⅱ巻, p.156, 昭和56年, 所収
- 5) 土仲高明氏所蔵
- 6) 前掲3)
- 7) 吉田 證「丹波の歴史」, ほか
- 8) 『園部町史』史料編第Ⅱ巻, p.425, 所収
- 9) 園部町教育委員会所蔵
- 10) 『園部町史』史料編第Ⅱ巻, p.487, 所収
- 11) 林野全孝「亀岡における町屋建築の変遷と特徴」『日本建築学会論文報告集』昭和41年10月
- 12) 福島家住宅は前掲11)にも調査がされている。今回はさらに新たな断面図2面を作成した。
- 13) 青山賢信 ほか「能勢地方における民家平面の変動過程」『日本建築学会論文報告集』第69号 昭和36年10月
日本民家集落博物館「能勢の民家」日本民家集落博物館彙報Ⅱ, 昭和40年
永井規男「摂丹型民家の形成」『日本建築学会論文報告集』第251号, 昭和52年1月
京都府教育委員会「京都府の民家」第六冊, 昭和45年
京都府教育委員会「京都府の民家」第七冊, 昭和48年, 他
- 14) 大本本部建設事務局「重要文化財旧岡花家住宅移築修理工事報告書」昭和49年
- 15) 前掲11) 林野全孝「亀岡における町屋建築の変遷と特徴」
- 16) 拙稿「奈良盆地における町家の発展過程—架構形式の変容を通して—」
『日本建築学会計画系論文報告集』403号, 平成元年9月
- 17) この指摘は林野博士の亀岡論文(前掲11)にて既になされているが、本稿はその関係をより明確にしえたといえよう。
- 18) 『亀岡市史』中巻, p.204, 昭和40年
- 19) なお、当家庭の平面は1列3間取り型で、表にミセを設け町家としての構成を備えているが、土間裏手に部屋を設ける構成は旧岡花家住宅と通ずる点が注目される。
- 20) 園部城下は大堰川の舟筏によって、京都と水陸の交通路に恵まれた。
『園部町史』史料編第Ⅳ巻, p.25, 昭和50年

(1989年8月10日原稿受理, 1990年4月7日採用決定)